



渡辺直寛著

「南十字星は見ていた 翔鶴軍医官日記」
を読んで

札幌医科大学医師会
札幌医科大学医学部長

堀 尾 嘉 幸

先輩にして、ずっと頭の上がらないE大学のM教授から、ぜひ読んでみなさいと赤い表紙の分厚い本が送られてきました。本の著者はM教授の恩師にして、私も院生の頃より随分とお世話になってきたW先生のお父上でした。忙しさに託けてそのままにしていたら、学会だったか何かの折にM教授に捕まってしまう、「ところで、堀やん（私のこと）、あの本はどこまで読んだん？」とチェックを入れられてしまいました。しどろもどろにお答えしてやり過ぎましたが、諦めて？送られてきた本を読み切りました。

著者の渡辺直寛氏（故人）は大学を卒業してすぐに昭和16年9月、軍医として海軍に入られたという方です。その本は手元に残された手帳を元に、軍隊に入った後のことについて、詳細に書かれたものでした。前書きは昭和59年4月となっています。著者は戦時中の体験を書き残すことが、過酷な戦争を生き抜いた義務であり使命であろうとっておられます。

今からははかり知ることが難しいのですが、当時の医学生は卒業と同時に、あるいは遅かれ早かれ、徴兵検査を受けて陸軍軍医に徴兵されていったのだそうです。陸軍に行きたくない者は海軍を選んだようです。陸軍でも海軍でも当初は2年間の勤務のあと、予備役となって帰るはずだったものを、風雲急となり勅令により現役を続行しなくてはならなくなったと書かれています。ちなみに、昭和20年に、札幌医科大学の基礎となった道立女子医学専門学校が設立されています。北海道の他にも、女子医学専門学校はいくつか設置されました。医師と男子は戦場に行ってしまう、国内では本当に医師が不足していた時代だったのだと思います。

著者は海軍軍医中尉として入隊しました。最初、訓練で就寝したかと思うとすぐ起こされ、軍服、軍帽にて校庭に整列させられる。だが、所要時間が長過ぎるとして、再び「就寝－起床」を命じられる。靴下を穿いているものは見付けられてしぼられる。「就寝－起床」の訓練にヘトヘトになってからやっと許されるとありました。一方で、舷梯を降りる時は下官から、上がる時は上官から、乗用車に乗る時は上官は先に右側に、降りる時は下官から降りる。教室は数人でいる時は公室になるのでノックの必

要はないが、一人のときは私室なのでノックするなど礼式を習っています。礼式は教えるからできるんだと思います。今の学生にもルールを教える必要があるかもしれません。

著者はちょっとしたことでも常に研究的態度を持って当たることや、冷静な科学的立場を保持することか、あるいは人間的であるべきであり、階級にとらわれずに患者として取り扱うようにとか、今も通じる内容の講義も聞いています。

昭和16年頃から艦船に乗り組んだ者は昭和18年頃から交代していき、その後から艦船に乗り組んだり、陸上部隊に派遣された者から多数の戦死者が出て、同期軍医134名のうち30名が戦死したとあります。著者は“翔鶴”という航空母艦に乗り込むのですが、同僚から「遺言状を陸上に置いてきたのか」と問われて驚いています。

“翔鶴”は真珠湾攻撃に参加して、その後、ラバウル、印度洋と形勢は次第に悪化して、珊瑚海の海戦では著者は生きて地獄を見たと言っています。轟音、大音響の中、傷者収容所は溢れ、たちまち満員になり、治療室の床は血糊と火傷治療のための肝油でヌルヌルになり、包帯を靴に巻き付けて滑り止めにしました。艦橋の鉄板一面に肉片、毛髪が固くへばり付いて爆発のものすごさを物語っていました。戦死者は急造した棺桶に1遺体ずつ重石のための演習爆弾を入れて、棺桶を軍艦旗で包みます。手空きの者が整列、弔銃を撃ち、ラッパ鳴奏のうちに1遺体ずつ海中に沈めていく。その後の戦闘でさらに戦死者が増え、合計で153名が亡くなりました。この頃、米軍空母にはレーダーがあったが、日本艦船にはまだ十分普及していなかったようです。

ソロモンでの海戦を経て、南太平洋の海戦ではさらにさらに厳しい局面に著者は遭遇しています。著者は昭和18年に入り“翔鶴”を降りましたが、その“翔鶴”は昭和19年に潜水艦の攻撃により爆発沈没し、1,300名余りの乗船者のうち、700名近い人が運命を共にしたとあります。

今から70年余り前に起きた出来事です。